

【資料紹介】「白山立山八龍大王辺の鳥瞰古寫図」について

奥澤真一郎

はじめに

この度、筆者は信州大学附属図書館所蔵の小谷コレクションの中に、立山連峰ならびに立山からみられる他国の山々、立山山麓の村落や宗教施設、登拝者などを描いた絵図があるのを確認した。資料名称を「白山立山八龍大王辺の鳥瞰古寫図」（図1）というその絵図は、当館が所蔵する「立山曼荼羅」など、他の立山関連の絵図とは異なった特徴を多数もっており、今後の立山信仰史や登拝の歴史の研究に資する貴重な資料と考えられるので、本稿にて紹介するものである。

1. 当該資料の概要

当該資料を含む小谷コレクションは、約8000点に及ぶ日本有数の山岳図書資料であり、小林義正氏が蒐集した「高嶺文庫」^{たかねぶんこ}を母体としている。その後、昭和49年（1974）に小谷隆一氏に譲渡され蔵書数を増やし、平成15年（2003）に信州大学山岳科学研究所に寄贈され、現在は同大学附属図書館にコレクションが収蔵された。

当該資料の購入時に添えられていたとみられる値札（図2）には「安政四年彩色物 白山立山八龍大王辺の鳥瞰古寫図」とあり、価格が2,000円となっている。また販売元は、「木内店書」^(ママ)（木内書店の誤り）とあり、東京都文京区本郷に店舗を構えていたようである。また値札に同書店の電話番号が記載されている。この値札の電話番号が市外局番なしの二けた番号となっている点について、東京都内で市外局番なしの二けたの番号だったのは、昭和27年（1952）の電電公社設立から昭和36年（1961）までである。以上の点から当該資料の履歴のうち、販売元と入手者、入手時期を推定すると、東京の古書店、木内書店が販売していた当該資料を、昭和27～36年の間に小林義正氏が購入したといえるだろう。

当該資料に付属する値札に「白山立山八龍大王辺の鳥瞰古寫図」と記載されている。現在の資料名は上記の通り、当該資料に付属する値札の絵図名称によることがわかる。この資料名称はこの古書店で定められたものである可能性が高いが、当該古書店以前の資料来歴は不明である。以下に基本的な資料情報を整理しておく。（令和6年11月26日、筆者が信州大学附属図書館にて当該資料を調査、撮影した）

- ・資料名称 「白山立山八龍大王辺の鳥瞰古寫図」
- ・書誌ID NB00009421
- ・所蔵者 信州大学附属図書館

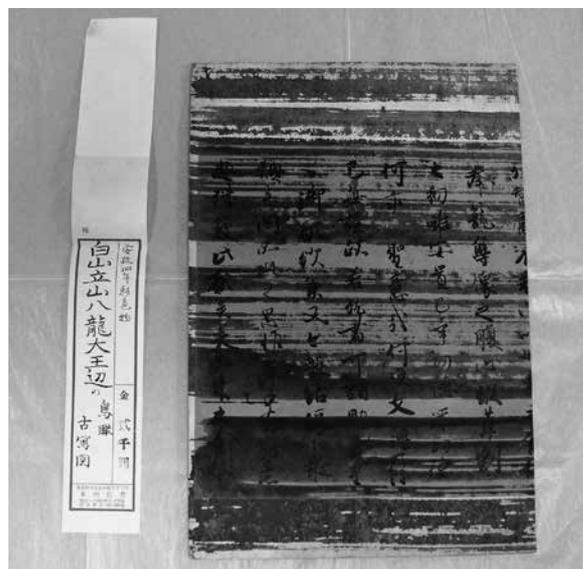


図2 値札と表紙の厚紙

- ・形 態 墨彩。マクリ。料紙を継ぎ合わせて1枚の絵図に仕立ててある。裏打ちが施され、絵図の裏側の右半分に厚紙を貼り、その厚紙を二つ折りにして表紙、裏表紙としているが簡易的なもので、表装はなされていない。元々はもっと大きな絵図であったとみられ、料紙を切り取って貼り合わせた痕跡や絵や文字が途中で切れている箇所、折り目の跡が随所にみられる。虫損はない。経年劣化によるスレ、ヤブレ、ツカレなどもほとんどなく、保存状態は良好である。
- ・法 量 本紙タテ 48.8cm ×ヨコ 68.8cm、外寸タテ 50.2cm ×ヨコ 69.4cm（厚紙部分の最大幅の部分を含む）
- ・附 属 品 当該資料に付属する値札1点。

2. 資料中の山座名・地名などの翻刻、分類について

当該資料を分析するにあたって、まずトレース図（図3）を作成した。そしてそこに描かれた山や河川、山中の地名、神社仏閣の名称などを翻刻し、資料内に書き込まれている絵や山型、方角などを手掛かりに描かれた事物を同定していく方法をとった。なお、トレース図内に記入した記号は、以下の基準をもとにつけた。

記号 a：立山連峰以外の山座名、越中以外の地名

記号 b：立山連峰に属する山座名、立山に付随する地名、その他の事物名称など

記号 c：立山山麓の地名など

記号 R：河川の名称

記号 A～C：当該絵図の由緒書、図面内部分の説明書きと考えられる詞書の箇所の翻刻。

これらについては後述。a～Rの記号は図面左側から右側の順に記号を付けているが、詞書 A～Cに関しては、時系列的な意味もあって絵図の右側から左側の順に記号を付けたことをお断りしておく。

さて、以上の基準によって作成した当該資料の山座名、地名などを一覧にしたものが「表1 「白山立山八龍大王辺の鳥瞰古寫図」に描かれた山座名、地名など」である。なお、文字の判読が困難で翻刻に未詳箇所があるため、絵図内の記述内容には把握しきれない部分が残されていることを了承されたい。

3. 資料の分析・考察について

まず、当該資料に描きこまれた山座、地名などについて、順にみていきたい。全国各地の有名な山座が名を連ねているが、中には山座名称というよりも神社仏閣や山号、山座に止住する神仏の名称と考えるのが妥当なところも散見される。また絵図の四隅のあたりに方角が記してあるが、各山座の存在する場所と方角が必ずしも一致していない。例えば、「立山大権現」と記されている山座は雄山と同定して間違いないと思われるが、この雄山を中心に立山連峰の山々があたかも「立山曼荼羅」の如くに並べて描かれている。一方で南の位置に加賀白山が描かれていたり、山城国も南の方角に描かれていたりしている。これはおそらく、様々な地点からみた山々の位置を複合的に重ね合わせて描かれているため、一つの基準視点があるわけではなく、多視点からみた山座や事物の配置をつなぎ合わせて一枚の絵図に仕立てて描いているためであろうと思われる。

3-1. 表1 「a 立山連峰以外の山座名、越中以外の地名」について

さて、最初に「a」の項目に関して検討したい。絵図全体を見ると、全国の山岳信仰で有名な山座が細かく描かれており、例えば信州浅間山の様子が、噴煙が東の方向にたなびいているように描かれるなど、特徴

をとらえた描き方となっている。これらは立山連峰から遠望することが出来る山座が描かれていると考えられる。一方で、a-20にある「甲州佛山」については、山座名とも神社仏閣名あるいは山号とも考えられ、その同定は困難である。甲州（山梨県）といえば、古来南アルプスの地藏ヶ岳（標高2764m）、観音岳（標高2841m）、薬師岳（標高2780m）の「鳳凰三山」や甲斐駒ヶ岳が有名であり、立山から遠望できる南アルプスの高峰群が一座も描かれないのは不自然でもあるので、この「甲州佛山」は、「鳳凰三山」等の信仰に係わる南アルプスの山座を表すとも考えられる。

次にa-29について検討してみたい。まずは翻刻を以下にあげる。（図4）

志ヶ峯 平家の落人里 今百万石領

「志ヶ峯」については、詞書から山座ではないと考えるべきであろう。「今百万石領」とあるので、加賀藩の領内に存在する集落と考えられる。手掛かりとなるのは「平家の落人里」である。そしてa-29に向かって左側には浄土山、薬師ヶ岳、下方には集落が描かれている。これらの位置関係から推測するに、この集落一帯は有峰村と考えられる。野崎雅明『肯構泉達録』⁽¹⁾にも、「何れの時にか詳かならず。平家の落人多くここに隠るといへり、いまなほ武具を伝ふ」とある。なお『肯構泉達録』には、加賀藩政期のある時点まで、有峰村が加賀藩領か飛騨領か帰属が不明であったが、加賀藩が村民の嘘を見破り加賀藩領としたという伝承もあり、この詞書を書いた者もその伝承を踏まえて書いていると思われる。⁽²⁾

3-2. 表1「b 立山連峰に属する山座名、または立山に付属する地名、その他の事物名称など」について

次に「b」の項目について検討したい。この絵図における立山連峰の山座名称の特徴として、「立山大権現」「白山大権現」「八龍大王」等、それぞれの山座に止住するとされる神仏名や「別山宮」といった頂上付近に建てられている祠の名称で表されているという点があげられる。『和漢三才図会』⁽³⁾には、「當國 神社仏閣名所」として、以下の山座、山中の地名および神仏があげられている。「立山権現…（中略）麓ノ大宮也。此自り絶頂本社二至ルマテ凡ソ十三里八町…」^(ママ)「白山権現堂」「行者反」「別山帝釈天」。一方で、同書には「浄土山阿彌陀堂」「折立富士権現」等の記載があるが、こちらの絵図には特に記入されていない。絵図の「立山大権現」については、祠（頂上社殿）が南向としるされているが、これも『和漢三才図会』と一致する。

また、劔山峯（劔岳、以下括弧内の山座名は、同定された山座の現代の標準的な名称を意味する。詳細は、表1を参照のこと）、地念塔、別山宮（別山）、白山大権現（大汝山）、立山大権現（雄山）、薬師ヶ嶽（薬師岳）、御來光所、八龍大王山（龍王岳）、浄土山（浄土山）に「○」がつけられている。これらは立山連峰主稜部上に位置する山座等の名称と考えられる。この絵図において「○」がつけられている山座の並び順は、左から右側に、劔山峯→別山宮→立山大権現→薬師ヶ嶽→八龍大王山→浄土山となっている。「立山曼荼羅」においては描かれる山座にかなりのばらつきがあるものの、描かれる範囲は限定される。通常、劔岳→別山→（真砂岳）→（富士の折立）→大汝山→雄山→浄土山の並び順となっており、薬師岳が描かれることはない。これは、室堂平から立山本峰を遙拝した時の視点で各山座が描かれているためと考えられる。一方、この絵図では、山座は画面の左から右へ雄山→薬師岳→龍王岳→浄土山の順に描かれる。これは雄山山頂から見た山座の並び順（遠近は無視し方角の順とする）に一致し、これら山座配置を描いた視点は、雄山付近の主稜線上にあることがわかる。

ここで「b」について、さらに詳細に見ていきたい。b-3の地念塔は、^{じねん}「立山曼荼羅」や「立山登山案内図」では、「自然ノ塔」などとされて必ず描かれるものである。この絵図では五重塔として描かれているが、「立山曼荼羅」では、三重塔で描かれていることが多い。前述の『和漢三才図会』でも、「劔山」の項に「山腰に石塔有り」とし、「不思議の石塔」といわれ、多くの「山絵図」にも「自然石也」と書かれている。また延命院玄清の写しとされ、「立山曼荼羅」の絵解きの台本といわれる『立山手引草』⁽⁴⁾には、「…向ニハ高々ト御前ヲ拝ミ後ニハ五古ノ劔山ヲ後光として自然ノ塔ヲ池ニウツシテ拝スルナリ…」とあり、この「自然ノ塔」が非常に重要な塔であるとしている。しかし周知の通り、この塔は実在していない⁽⁵⁾。この絵図の制作者が、

「地念塔」に関心を持っていたのはなぜであろうか。

次にb-8「岩屋蓮花穴」について検討したい。ここは立山信仰における聖地とされる「玉殿窟」と考えて間違いなからうと思われる。「立山曼荼羅」においては、佐伯有頼が熊を追いかけてここにたどり着いたところ、窟から阿弥陀如来が現れたという重要な場所であるが、本絵図では阿弥陀如来ではなく、蓮台が描かれている。「立山曼荼羅」や「立山登山案内図」においても、阿弥陀如来の代わりに蓮台が描かれているものは多くあるので⁽⁶⁾、そのような絵図を見たことがある人物が描いているのかもしれない。また、b-17「大日ヶ嶽」附近に錫杖をもった修験者のような人物がいる、b-12「御来光所」、b-20「延魔堂」など、仏教に起源をもつ地名（名称）も各所にみられる。次にb-27「六地藏」、b-28「わらんぢぬきとり所」である。六地藏とされる場所には、この絵図の中で最も大きな堂宇が描かれているのが特徴である。この堂宇には非常に多くの登拝者であろう人物たちが行き来している様子が描かれている。この堂宇は立山大権現（雄山）の真下にあり、岩屋蓮花穴（玉殿窟）にも近いことから、室堂を指していると思われる。一方で、一人の人間がこのような登ったという、経時的変化を本絵図に表したという考え方もできるであろう。次に「六地藏」の名称についてであるが、廣瀬誠はその著書『立山黒部奥山の歴史と伝承』の中で次のように書いている。「室堂から御前（立山頂上、峰本社）へ登る道にかつては六道と呼ばれる地点があって、ここに六道地藏があった。今はその痕跡もない」⁽⁷⁾。このあたりで草鞋を脱ぐ習俗が果たしてあったのかについては検討を要するであろう。このほかb-38では刈込池の中に龍が描かれていたり、ヤゲン坂・カム口杉など現在ではその場所が判然としない地名などがあつたりして、絵図や文字から得られる情報が非常に多いのがこの絵図の特徴である。

3-3. 表1「c 立山山麓の地名など」について

ここでは「c」の項目について検討したい。上滝から、岩峯寺、芦峯寺といった禅定登拝道上の集落に加え、c-1、2の「岩不動道」「石不動」など大岩山日石寺に関する情報も盛り込まれている。c-2については、堂宇や三重塔なども描かれており、その特徴をよくとらえている。また、c-6「三途川 死出の山」は、「立山曼荼羅」には石碑に書かれているように表現されている（泉蔵坊本「是より死出の山」、宝泉坊本「死出之山路」、吉祥坊本「死出之山路」の3本がある）。

3-4. 図3内の詞書A～Cの翻刻とその内容に関する検討

さて、この項ではこの絵図の最も根幹をなす文字情報である、詞書A～Cについて検討を進めていきたい。まずは翻刻を以下にあげる。（図4～図6）

原文	書き下し文
詞書A（図4）	
行者	行者
矢内与右衛門	矢内与右衛門
安政三辰年	安政三年
七月十日登山	七月十日登山
當山地念塔尋参詣ニ	當山地念塔を参詣に尋ね
九月八日ヨリ十五日迄二□□（漸〃カ）	九月八日より十五日迄に（漸〃カ）（註）
奉登山見□（ルカ）	登山奉り見る
詞書B（図5）	
御當山の奥院	御當山の奥院
此邊より	此邊より

□□□（臨ミテ（互）カ）
御本社左右ヨリ
二十五ヶ國ヲ見る

臨みて（？）
御本社左右より
二十五ヶ國を見る

詞書C（図6）

安政四丁巳年
八月十三四五六七八日
留逗中於當飛驒國
四城郡阿曾谷村利右衛門□
□□ニ留逗
□□□□（被申カ）付中
六十二歳老
翁行者之為□（文字カ）
陸奥國館ヶ岡住人
矢内与右衛門知義
是越□（書カ）興シテ（合略文字シテ？）
申出登者也

安政四丁巳年
八月十三四五六七八日
當飛驒國に於いて留逗（逗留の事カ）中
四城郡阿曾谷村利右衛門□
□□ニ留逗
□□□□（被申カ）付中
六十二歳老
翁、行者の為□（判読不能）
陸奥國館ヶ丘の住人
矢内与右衛門知義
是を□（書カ）き興して
申し出で登る者也

註 「漸々」と判読するならば、「ぜんぜん」となり「徐々に」「少しずつ」の意となる。あるいは「ようよう」とも読むか。

詞書A～Cのうち、AとCが当該絵図来歴の由緒書のようなもの、Bは図面内の解説とすべきであろう。詞書Aについては、矢内与右衛門なる行者が、安政3年（1856）に7月10日と劔岳の自然ノ塔に参詣するために9月8日から15日までの2度にわたり登ったとある。劔岳は久しく登頂が禁忌とされていた山である。資料的な裏付けが十分ではないのが残念であるが、事実とすれば非常に興味深い⁽⁸⁾。詞書Cの部分は、前半の部分に判読不能の文字が多く、文意が十分に読み取れない。安政4年は西暦1857年、四城郡阿曾谷村は、現在の岐阜県吉城郡麻生野村のことであろう。後半部分は矢内与右衛門知義に関する記述の続きである。矢内与右衛門は陸奥國館ヶ丘（現福島県須賀川市。鎌倉時代の作とされる館ヶ丘摩崖仏がある）の行者で、矢内こそがこれを描いた人物だということであろう。

次に詞書Bについてみてみたい。この一文は本図中の薬師ヶ嶽と立山大権現（雄山）の間に書かれている。そのため、「御當山」「奥院」がどこを指しているのか判然としない。特に「御當山」は薬師岳、雄山のどちらも指しているとする見解も可能であろう。「奥院」については、『立山手引草』に次の一文がある。

「…富士ノヨリ立眞砂ノ嶽ハ豊斟淳尊ニシテ炎王光仏ナリ。是レヨリ此ノ別山マテノ間ニハ様々ノ名所嶮嶮ヲ通り是ガ奥ノ院別山ナリ帝釈天ノ御在山ニシテ…」

仮に「御當山」を雄山とし「奥院」を『立山手引草』に記載されている通り別山とするならば、なぜこの文章を絵図中のこの位置に書いたのかが判然としない。これについても検討を要する。また、「御本社左右ヨリ二十五ヶ國ヲ見る」とは、どのようなことであろうか。念のため、本絵図中にみられる国名（山座名称）を挙げると以下のようになり、19の国名が書かれている。

東北	出羽
関東	上野、甲斐、相模、武蔵
東海	三河、遠江、美濃、飛驒、伊勢
北陸・信越	加賀、越前、若狭、信濃、弥彦（越後）、（越中）

関西 山城、伊吹（近江）、紀伊 合計 19か国

（ ）内の国名は、絵図中には記載がないが、その国にある山座名があることから含めた。また紀伊と伊勢は文字が切れているので、断定はできない。通常、御本社といえば、雄山山頂の社殿を指すことが多いが、これについても検証が必要であろう。

まとめ

以上、検討してきたように、当該資料については翻刻に不十分なところを残し、文意が把握できぬままとなった箇所も少なからずあるのが現状である。このような点については、識者のご教示をいただきたいと考えている。

分析・検討してきた結果に基づき、この絵図の属性と立山に係わる絵図類における位置づけについて、以下にまとめる。本絵図では常願寺川や生妙瀧（称名瀧）の描き方に「立山曼荼羅」や立山に係わる山絵図の影響が見られ、描き手はこれらの絵図をある程度は目にしていると思われる。

また加藤基樹は「立山曼荼羅」の認定基準を明快に論じている⁽⁹⁾ので、まず「立山曼荼羅」と本絵図との関連を見ておく。加藤は「立山曼荼羅」が礼拝画の機能を持っていることに着目し、「勸進布教、立山権現の礼拝・遙拝を意図した立山の絵」であること、「縁起の全場面あるいは一部の場面描写が備わるか、玉殿窟に感得仏の姿（蓮台も含む）が描かれている絵画」を「立山曼荼羅」と規定した。本絵図においては、勸進布教が目的の絵画とはいいがたく、また立山権現の礼拝を意図したものでもなかろう。玉殿窟に蓮台が描かれている点は合致するが、熊や白鷹は描かれず、立山の縁起の場面描写も見当たらない。よって本絵図は「立山曼荼羅」とは言えないだろう。

次にこの絵図には、大勢の登拝者が各山座を登り下りし、場所によっては遙拝している様子が描かれている。このように描かれた数珠つなぎにひしめく登拝者の列は、「立山曼荼羅」や立山関連の山絵図には見られない描き方である。これをつぶさに見ていくと、室堂から浄土山に登って、そこから一ノ越らしき場所に下り、雄山山頂まで行き、さらに稜線を縦走して行者返しから大汝山を経て別山に至っている。別山山頂では劔岳に向かって遙拝している登拝者の姿もみられる。別山から登拝者は、賽の河原まで下りて室堂に帰着している様子もみられる。そこからさらに一部の登拝者は地獄谷の方まで行っていることもわかる。この道筋はかつて「三山めぐり」といわれた登拝道であろう。このことから本絵図は、立山における巡礼の道筋を紹介する目的もあったと考えられよう。

またこの絵図の上部にはすでに述べた通り、中部日本を中心に東北地方南部から関西地方東南部に至る山々が描き込まれる。このような描き込みは、「立山曼荼羅」や立山関連の山絵図には類例がない。絵図の詞書に記された行者が、これまで巡った、あるいは行者間から得た情報に依拠した信仰登山に係わる山嶺の分布概念図のようにも見える。また、磐座や巨岩の存在で知られる山座が選ばれているようにも見える。

当該絵図資料についての要点は以上のようにまとめられるが、残念ながら、翻刻に不十分なところを多数残し、文意が把握できないままとなった箇所も少なくないため、明確な判断を下すことができないのが現状である。判断保留、未解明の部分については今後の課題といたし、このような点については識者のご教示をぜひ頂きたいと考えている。本絵図に関する知見が立山に係わる山絵図の研究の一助となれば幸いである。

【註】

- (1) 野崎雅明『肯構泉達録』（『肯構泉達録』、KNB興産、1974年所収）。
- (2) 廣瀬誠『立山黒部奥山の歴史と伝承』P139（桂書房、1984年）を参照の事。
- (3) 寺島良安『和漢三才図会』卷六十八越中（『和漢三才圖會 [下]』、株式会社東京美術、平成4年所収）。
- (4) 延命院玄清写『立山手引草』（林雅彦『増補日本の絵解き』、三弥井書店、1984年所収、原典は嘉永7年（1854）の成立）。なお、本書には別山より遠望できる山として、「越後の弥彦山」「タクケムリ信濃ニモユル浅間山」「富士ノ御山」「箱根ノ山」「伊勢ノ国浅間ノ山 [朝熊山]」「越ノ白山」「近江ノ鏡山」を挙げている。
- (5) 自然ノ塔については、平成25年度特別企画展『立山と帝釈天—女性を救うほとけ—』展示解説図録（富山県[立山博物館]、2013年）に所収する加藤基樹の論考に詳しい。そこで加藤は、この自然ノ塔が描かれる理由について、①劔岳全体を岩座としてご神体として祀り、その遥拝山として別山が機能したことから劔岳の塔は舍利塔であり、近世にもこの二山の関係性が残った。②元禄・宝永期に立山山麓に定着していた庚申信仰の影響で、作善を行った人の名を記して三重塔を建てるという信仰が近世に残り「立山曼荼羅」にも描き続けられたという、2つの見解を提起している。
- (6) 「立山曼荼羅」においては、中嶋家本、志鷹家本、立山博物館C本、同E本、同G本、飯野家本などがあげられる。
- (7) 廣瀬前掲書P593
- (8) 米原寛「劔岳信仰」をめぐる若干の考察」（『研究紀要』第15号所収、富山県[立山博物館]、2008年）。
- (9) 加藤基樹「『立山曼荼羅』は何を伝えようとしたか—宗教的機能と思想史的背景—」（『研究紀要』第20号所収、富山県[立山博物館]、2012年）。

【謝辞】

本稿の執筆にあたっては、当該資料画像の撮影と本稿への掲載について信州大学附属図書館に便宜を図っていただいた。また吉井亮一氏には、山座名称や地名などの翻刻・同定や関連山座の山岳信仰に係わる知見の提示を得た。各位のご協力に深甚なる謝意を表す。

【付記】

当該絵図に描かれている全国の山座は、立山連峰のある地点から遠望できると書いたが、その後、当該絵図を多角的な視点で描いたという点を考慮しても、必ずしも遠望できない山座があることが分かった。

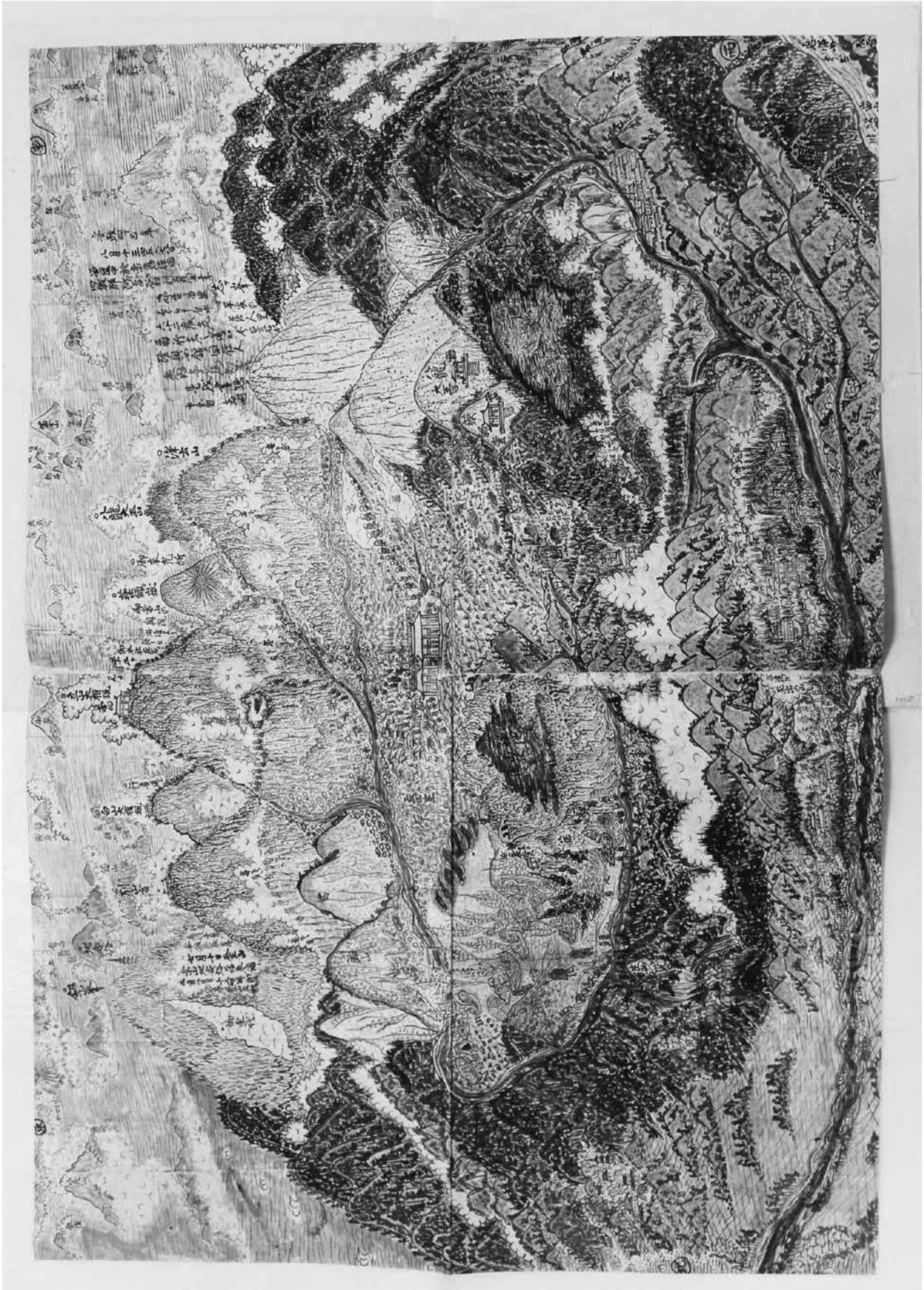


图 1. 白山立山八龍大王辺の鳥瞰古寫図



図3. 「白山立山八龍大王辺の鳥瞰古寫図」トレース

表1 「白山立山八龍大王辺の鳥瞰古寫図」に描かれた山座名、地名など

記号	山座・地名など	比定される山座・地名など	備考
a 立山連峰以外の山座名、越中以外の地名			
a-1	佐渡	佐渡	
a-2	八彦山	弥彦山	越後
a-3	越後國	越後國(新潟)	山型の連続は、越後南部の山座か。
a-4	○に東 出羽國 太陽	東 出羽國(山形) 太陽	
a-5	春名	榛名山	
a-6	□□□(國カ)		表記、山座ともに不明。
a-7	□□		表記、山座ともに不明。
a-8	信州九頭龍山	九頭龍山	
a-9	上州赫城	赤城山	
a-10	信州戸隠	戸隠山	
a-11	鑓山	槍ヶ岳	鋸齒状の山型は、槍・穂高を併せた山域を示すか。
a-12	信州浅間山	浅間山	煙が東の方向へたなびいている。
a-13	飛騨國 乗り倉	飛騨國(岐阜県北部) 乗鞍岳	
a-14	笠岳	笠ヶ岳	
a-15	信州御嶽山	御嶽山	
a-16	武蔵國小佛	小仏峠カ	
a-17	富士山 山の神 相州□□	富士山 該当する山座不明	相模、武蔵、甲斐に山の神信仰で知られた複数の山座あり。相州の上方に位置する山。 三□、六カ、雁坂カ
a-18	甲州生延 七面山	甲州(山梨県)身延山カ 七面山	
a-19	濃州山嶽カ		嶽または嶽か。これらは美濃の山々を指すか。
a-20	甲州佛山	山座不明	あるいは仏閣を指すか。鳳凰三山の可能性も有
a-21	美濃國 谷扱	美濃國(岐阜県南部) 谷汲カ	谷汲山華嚴寺を指すか。
a-22	遠州 秋葉	秋葉山	本宮秋葉神社
a-23	參州 石巻 石巻山のやや右上に、「勢」の文字。・・・伊勢カ	三河(愛知県東部)の石巻山	山が信仰の対象、石巻神社
a-24	三州 猿投	三河(愛知県東部)の猿投山	巨石信仰の山
a-25	加賀白山	白山	
a-26	伊吹山 伊	伊吹山 紀伊カ	○に南の右側 伊吹山の右側、文字が切れている。
a-27	若狭國 □法喜カ	山座不明	
a-28	越前 大野山	山座不明	
a-29	(翻刻) 志ヶ峰 平家の落人里 今百万石領		山座不明。有峰か。平家の落人伝説有。
b 立山連峰に属する山座名、立山に付属する地名、その他の事物名称など			
b-1	○劔山峯	劔岳	「劔峯」の可能性も有。
b-2	御霊代	雪溪に見えるが、劔岳山中にこの地名もしくは場所があるかは不明。	
b-3	○地念塔	自然ノ塔(実在せず)	本図では五重塔。三重塔に描かれる場合が多い。
b-4	○別山宮		別山山頂の祠を指すか。
b-5	雪下有カ		
b-6	○白山大権現 ○行者返し	行者返し	大汝山を指すか。 嶮難の地(「和漢三才図会」「金草鞋」等に記載有)
b-7	○立山大権現 南向	立山大権現 南向 雄山を指す。	雄山山頂の社殿
b-8	岩屋蓮花穴	実際の場所と異なるが、玉殿窟を指すか。	
b-9	歳の川原	賽の河原	石積みあり。
b-10	□□□(清め家カ) 雪下有カ	祓堂カ	堂宇の上の文字 左側の文字
b-11	○薬師ヶ嶽	薬師岳	山の中腹に太陽。
b-12	○御來光所	実在は不明	

記号	山座・地名など	比定される山座・地名など	備考
b-13	○八龍大王山	龍王岳	
b-14	○浄土山	浄土山	
b-15	一枚帆の和船を指すか。とすればこの辺りは富山湾を指すか		
b-16	□山		瀧山と判読できるか。
b-17	大日ヶ嶽 太日	大日岳	太日は堂宇のことか、錫杖を持った修験者有。
b-18	生妙ヶ瀧	称名瀧	
b-19	五十丁の瀧	不明	
b-20	延魔堂	閻魔堂	堂宇有。地獄谷周辺と推測されるが。
b-21	八□	判読不能	
b-22	八□	判読不能	
b-23	畜生原	畜生原	
b-24	緑ヶ池 山伏池(トモ)	みどりが池	合略文字「トモ」
b-25		川の中に文字有。判読不能	右から「右辺 深 底」と読めるか。
b-26	火車		文字のみで火車を表す絵はない。
b-27	六地藏	大きい堂宇2つあり、中に参詣者。上に小さな祠。室堂を指すか 室堂から峰本社までの登山道に六道地藏があったというが、現在は無い。場所も未定。	
b-28	わらんぢぬきとり所	不明	実際にここで草鞋を脱ぐ習俗はあったのか。
b-29	雪		
b-30	雪		
b-31	弥陀ヶ原	弥陀ヶ原	「弥」の字が切れている。餓鬼田の絵がある。
b-32	一の谷	一の谷	この辺りでは、獅子ヶ鼻の「扇掛け松」が有名だが、これに比定できるか。
	福□杉	不明	
b-33	ヤゲン坂 カムロ杉	両方とも所在地不明	
b-34	中空カ	不明	
b-35	八龍大王□(宮カ) 西向	不明	料紙の切れ目で、「宮」か判読が困難。
b-36	薬師堂 西向	不明	
b-37	草生坂 小金坂 材木石坂 バリ穴 □(姫カ) 杉 ヒメ	しかりばり、杉は不明	杉の絵あり。然り張りも杉も所在不明。
b-38	カリコミ池	刈込池	池の中に龍が描かれている。
b-39	吊り橋のような形状から、藤橋と推察される。		
b-40	多くの建物があり、煙らしきものが出ているところから、立山温泉ではないか。		
b-41	金山	不明	亀谷銀山など関係あるか？
c 立山山麓の地名など			
c-1	是乃岩不動道		
c-2	石不動	大岩山日石寺のことか。	堂宇、三重塔あり。
c-3	上瀧□□出ル	舟で川を遡る様子が描かれる。	
	是乃立山十三里		
c-4	岩倉寺 本宮	岩倉寺。本宮は何か、不明。	
c-5	此間三里三ヶ村		宮路・横江・千垣のことか。
c-6	三途川 死出の山		立山曼荼羅との関連性
c-7	若宮有		下に鳥居の絵
c-8	ハシクラ寺	芦峯寺	
c-9	御死出山		大きな堂宇有。
c-10	太鼓橋のような形状から、布橋と推察。橋を渡ると大きな堂宇有。		
c-11	當山□(船カ) □川		
	飛弾國より出ル		
	茂登カ	不明	
R 河川の名			
R-1		現在の常願寺川	山絵図の川の描き方に類似している。
R-2		現在の称名川	
その他の河川		c-10を布橋とするならば、そこを流れる川は現在の姥谷川に相当。	



図4. 詞書A

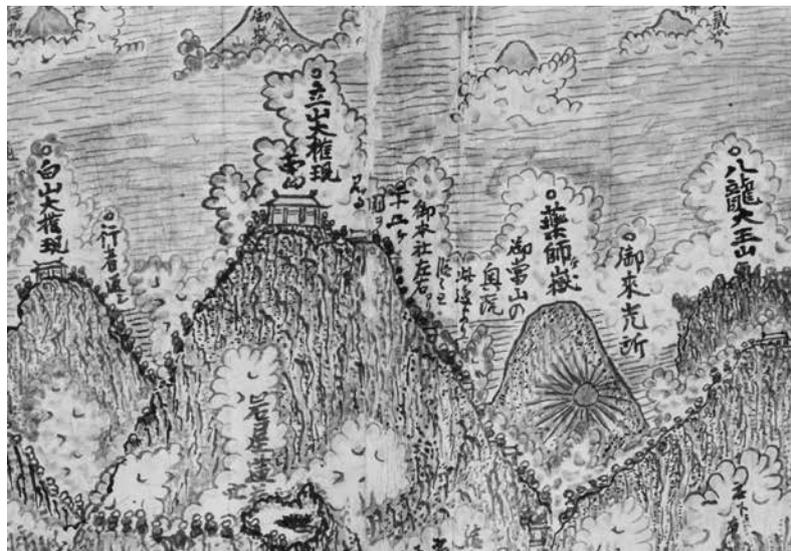


図5. 詞書B



図6. 詞書C